シェリングと思弁的転回
——グラントのシェリング主義について——

浅沼光樹

はじめに——シェリングと思弁的転回

論文の目的

この論文が主題として取り上げるのは、一般に《思弁的転回》と呼ばれている——おそらく二一世紀最初の本格的かつ大規模と言ってよいであろう——思想動向である。《思弁的転回》とは《思弁的》として特徴づけられる一種の《実在論》への《転回》の謂であり、ロンドンのゴールドスミス・カレッジで二〇〇七年四月に開催されたワークショップを起源とし、レイ・ブラシエ、イアン・ハミルトン・グラント、グレアム・ハーマン、カンタン・メイヤスーという四人の提題者がこの運動の創始者と目されている。

筆者の関心をひいているのは、この四人の創始者の内、グラントが『シェリング以後の自然哲学』の著者であって、一種の《シェリング主義者》としてこの動向の起源の一角を担っている、ということである。やや極端に聞こえるかもしれないが、この意味においては《思弁的転回》という思想動向そのものが最初から——少なくとも部分的には——シェリング哲学との関わり合いの内にあった、と言えるかもしれない。このような理解のもとで小論は《思弁的転回》の四人の創始者の内、特にグラントに焦点を絞り、彼の哲学的立場の中で一体いかなる仕方で《思弁的転回》

とシェリング哲学とが内的に結合しているのか、ということを可能な限り明らかにしようと思う。

このような特殊な視角から《思弁的転回》にアプローチする理由は、偏に一つの問題意識、すなわち〈シェリング哲学のアクチュアリティー〉への強い関心にある。この関心に基づいて言い改めるなら、〈シェリング哲学が二一世紀の初頭においてどのような意味を持ちうるのか〉という問題を、ここでわれわれは《思弁的転回》という最近の思想動向に注目しつつ、グラントの思想的立場に即して考察しようとしている、と言えるだろう。

論文の構成

論文の構成は以下のようになる。第一章では、綱領的アンソロジー『思弁的転回――大陸の唯物論および実在論』（二〇一一）の第一論文「思弁的哲学へ」に依拠しながら、《思弁的転回》の基本理念が確認される。第二章では、グラントの『シェリング以後の自然哲学』（二〇〇六）の第一章「なぜシェリングか、なぜ自然哲学か」に基づいて、彼のシェリング主義の骨子が叙述される。しかし本稿の目的は、《思弁的転回》とシェリング哲学とがグラントの哲学的立場において内的に結合している、その有り様に光を当てることにある。この目的をわれわれは、彼のシェリング主義の内に《思弁的転回》の理念を再確認する、という仕方で果たしたい。(一)

第一章　思弁的転回とは何か

第一節　思弁的実在論から思弁的転回へ

思弁的実在論

思弁的実在論という名称は二〇〇七年、ロンドンのゴールドスミス・カレッジにて行なわれた、われわれの最初の催しのために新たに造られた。緩やかにしか連関していない四人の著者を唯一の軛の下に繋ぎ止めるには、妥協の精神が必要である。思弁的実在論という名称はこのような妥協の精神から生まれた幸運な偶然の所産であった。（ST 21）

思想的出自を全く異にし、相互に矛盾対立している主張を繰り広げる四人の哲学者を「唯一の軛の下に繋ぎ止め」[二]ようとする努力は、図らずも《思弁的実在論》という新しい呼称へと結実する。成程、この哲学者達を――その多様性をいっさい漂白することなく――一つの纏まりとして捉えるのは不可能である。こうした試みは「妥協の精神」なしに成功する筈もない。しかし妥協の産物とはいえ、一つの名称が見出されるや否や、《思弁的実在論》と呼ばれる何ものかの存在が意識され、われわれにとって初めて存在するようになる。その意味では、この呼称は「幸運な偶然の所産」に外ならず、このワークショップは記念すべき《思弁的実在論》の生誕の地であった。

思弁的転回

二一世紀に入ってから、より混沌としているが、ある意味ではより将来有望な状況が形作られつつある。興味をそそる多様な哲学的動向と、世界中のあちこちに作られたその拠点が支持者を獲得し、この動向を象徴する著作の臨界量を生み出し始めた。この動向を完全に網羅しうる唯一の適切な名称を見出すのは難事だが、今ではもう退屈となった「言語論的転回」と対比して、熟慮の上でわれわれは「思弁的転回」という名称を提案する。副題にある「唯物論」と「実在論」の語はこの新動向の本質を一層判明にしてくれるが、同時に物質的なものと実在的なものとの区別の可能性も維持されている。(ST 1-2)

ところが二回目のワークショップ（二〇〇九年）の報告書を兼ねた綱領的アンソロジーが企画された際、表題に選ばれたのは《思弁的実在論》ではなかった。この論集は《思弁的転回》と題され、《実在論》は――新たに付加された《唯物論》の語と共に――副題の位置へと退く。しかしこれによって《思弁的実在論》と呼ばれていたものの本質が変化したわけではない。最初のワークショップと四人の登壇者の重要性にも変わりはない。《思弁的実在論》と呼ばれていたものの実質をより的確に表現するために、以前偶然に見出された名称が、熟慮の上に選ばれた呼称に場を譲

ったのである。

いまや今世紀初頭の多様な哲学的動向を包括しうるまでに視野は拡大され、これら全体を網羅する名称が改めて問題となっている。その結果として実在論（ないし唯物論）という側面は相対的に背景に退き、新たに《転回》としての側面が前景に押し出されている。勿論、最初の催しの際にも〈伝統に対する反抗〉という性格が全く意識されていなかったわけではない。[三] しかしそれに的確な言語表現が与えられ、より強調されることによって《思弁的実在論》が固定した教説や立場を意味するものではない、ということが一層明瞭になっている。《思弁的実在論》とは多様な哲学的動向の束である。この哲学的動向の束はある程度まで方向性を共有しながらも、多様性をさらに増幅させるという仕方で、自己の輪郭そのものを変化させながら、今なお成長しつつあるのである。

しかし《転回》と呼ばれる以上、《思弁的転回》は〈何ものか〉から〈何ものか〉への転回でなければならないであろう。

第二節　相関主義

《思弁的転回》は何からの転回なのか。《言語論的転回》が念頭に置かれているのは推察に難くない。しかし《思弁的実在論》に先行する他者は――メイヤスーに倣って――《相関主義》と呼ばれている。では《相関主義》とは何なのか。

> 私たちが「相関」という語で呼ぶ観念に従えば、私たちは思考と存在の相関にのみアクセスできるのであり、一方の項のみへのアクセスはできない。したがって今後、そのように理解された相関の乗り越え不可能な性格を認めるという思考のあらゆる傾向を、相関主義と呼ぶことにしよう。(meillassoux 2006 : 18)

メイヤスーの《相関主義》の定義はこのように至極簡単である。だが、その射程は思いのほか広い。

言語論的転回

現存する一切のものは心ないし精神の変種であるとする伝統的観念論の立場を軽蔑している間にも、大陸哲学はメイヤスーが「相関主義」と呼ぶ形態の、同様に反実在論的な態度に陥った。……この立場は暗々裡にこう考えている。われわれはわれわれの思想を存在に向けることができる、あるいは、世界=内=存在として現存しうる、あるいは、現象する限りでの世界の経験を持ちうる。しかし思想ないし言語から独立の領域については矛盾を犯さずには語りえない、と。無数の変種があるけれども、一貫してこの教説は、思想から独立している実在に関する知識などというものは受け入れがたいと主張する。(ST 3-4)

人間は……中心にとどまり、実在は……人間の思惟の相関項としてのみ現われる。この点において現象学、構造主義、ポスト構造主義、脱構築、ポストモダンは、例外なく大陸哲学における反実在論的傾向の完璧なる見本である。(ST 3)

《相関主義》の定義は《言語論的転回》以後の哲学の殆んど総てを包括する。現代哲学の現代性の所以であったはずのものが、《相関主義》という概念によって一網打尽にされ、克服の対象として捉えられる。これだけでも驚嘆に値するが、この相関主義(言語論的転回)の起源はさらにカントの批判哲学(批判論的転回)に求められる。

批判論的転回

この相関主義的転回の起源はイマニュエル・カントの批判哲学である。周知のように、この哲学は人間が到達しえない叡智的領域をいつか知るという可能性を誓って放擲した。カントの有名なコペルニクス転回では、もはや心が対象に合致するのではなく、むしろ対象が心に合致する。経験は、あらゆる知識の必然的かつ普遍的な基盤であるアプリオリなカテゴリーと直観の形式とによって構成される。しかしこの基盤を確保するために支払われる対価は、ものがわれわれに対して現象する有り様を超えたあらゆる知識の放棄である。実在そのものへの通路は、少なくともその認識の面から

は、遮断される。（ST 4）

これによって《相関主義》は言語論的転回のみならず、批判論的転回までも包括する極めて広大な射程を有するものとなる。言語論的転回は批判論的転回の延長線上に位置する、その第二形態と見なされ、カント以後の哲学史は、この相関主義的態度へと陥り、次第に深くその内へと絡みとられてゆく一連の過程として捉えられる。このような歴史理解に基づく哲学史は「このカントの禁止が、その反実在論的含意ともども、ヘーゲルからハイデガーを経てデリダへと至る殆どすべての主要人物を掴みながら、大陸的伝統の内をうねって進んできている」（ibid.）様子を子細に描出するであろう。

第三節　反相関主義的動向としての思弁的転回

反相関主義

こうして《思弁的転回》とは相関主義的態度からの脱却である。それ故、《思弁的転回》は思惟や言語の相関項にとどまらない実在、要するに《実在そのもの》を志向するものでなければならない。

> われわれが「思弁的転回」と呼ぶものに関する諸著作の中に人は何か新しいものの兆しを感知しうる。大陸哲学が繰り返しテキスト、ディスコース、社会的実践および人間の有限性に焦点を当ててきたのに対して、これらの新種の思想家は再び実在そのものに向いつつある。……彼らの全員が、そのやり方こそ違っているものの、思考から、より一般的には人間から切り離された実在の本性について再び思弁し始めたのである。（ST 3）

思弁――相関主義の限界と克服

こうして《思弁的転回》は《実在そのもの》を捉える能力を、その意味で単なる反省や批判ではない、《思弁》の能力を人間理性に認める。しかしこれは一種の退行に見えなくもない。

「思弁」というこの活動は何人かの読者の間では懸念材料となるかもしれない。というのも、それは批判以前の哲学への、そしてその純粋理性の力能に対する独断的信頼への回帰を暗示するかもしれないからである。(ibid.)

しかし《思弁的転回》は独断論的哲学への単なる復帰ではない。というのも、この《回帰》は相関主義的態度に「生得的に備わっている制限の認識」(ibid.)に基づくからである。相関主義の限界は、それが現実の新しい問題へ対処する能力を欠いているという点、および自らの生産力の限界に達し、今やわれわれの哲学的要求の内的拘束具としてのみ機能しているという点に明らかである。

これらの哲学による重要な寄与を嘲笑するつもりはないが、これらの哲学的動向には明らかに欠損がある。われわれを脅かす大規模な環境災害や次第に増大する日常世界(われわれ自身の身体を含む)へのテクノロジーの侵入に直面すると、反実在論的立場がこれらの発展に対処しうる装備を具えているかは不明である。危険なのは、大陸哲学の主流をなす反実在論的系統が単に収穫逓減点に達しただけでなく、それが今ではもうわれわれの時代の哲学の可能性を積極的に制限している、ということである。(ibid.)

このような二重の閉塞状況を打破するために、《思弁的転回》は敢えて《思弁》を復活させ、その未知の可能性に賭けようとするのである。

この意味において思弁は批判論的転回および言語的転回を「超えている」何ものかを目指している。このようなものとして思弁は、「思弁」という言葉が批判哲学の以前に持っていた〈絶対的なもの〉への関わりという意味を回復する……。本書に集録されている諸論考は〈実在そのもの〉への新たなる注目から得られるかもしれない見返りを目掛けての〈思弁による賭〉なのである。(ibid.)

先駆者――ドゥルーズとバディウ

より広いタイムスパンにおいて把握し直されることによって、初回のワークショップの四人の登壇者のみならず、彼らの先駆者と後継者も又われわれの視界に入ってくる。いま年長の世代に着目するならば、四人のオリジナル・メンバーの思想的傾向に呼応するように、四人の先行者（ドゥルーズ、ジジェク、バディウ、ラトゥール）が見出される。その内のただ二人に限ってごく簡単に言及しよう。

「哲学をテキストや意識の構造の分析に還元することに反対して、厳密に存在論的な諸問題に対する関心が近年、波が押し寄せるように高まってきた」（ST 4）が、「この分野の開拓者」（ibid.）と目されるのがドゥルーズである。「概念体系がもつ消極的制限の周囲を回るのを止めて、ドゥルーズとガタリは伝統的存在論の残骸を用いて一つの存在論的展望」（ST 4-5）を、「主観と思考がこれらの原初的な存在論的運動が最後に生みだした残余物にすぎない」（ST 4）ような「生成の非=主観的領域についての存在論的展望」（ibid.）を構築した。

ただし彼らが相関主義を完全に免れているか否かは議論の余地がある。これに対してバディウは「数学を存在についてのディスコース……と見做すことで」（ST 5）、「これ以上ないほど明白に現象学に対する反旗を掲げ、それによって現代大陸哲学における存在論による賭けを鮮明にしようとした」（ibid.）。さらにまた、長らく「嘲りの言葉」（ibid.）でしかなかった「真理の問題を堂々と復活させた」（ibid.）点でも、新時代の到来をバディウは高らかに告げている。

第二章　グラントのシェリング主義
――『シェリング以後の自然哲学』

第一節　本章の課題――《相関主義と思弁的実在論》という図式以前

《思弁的転回》とは《相関主義》に対する反対運動であり、一種の《実在論》への転回を意味していた。この動向のオリジナル・メンバーの一人として、グラントもまた反

相関主義という大きな枠組を共有している。しかし既に述べたように、この枠組は後から見出されたものであり、グラント自身は予めこの枠組に基づいて彼の議論を組み立てていたわけではない。

したがってわれわれはグラント固有の思想の文脈に立ち戻り、『シェリング以後の自然哲学』に見られる彼の思想的立場を再構成しながら、いわば生まれつつある《思弁的実在論》の一つをこの著作の中に見出すことにしよう。

第二節　カント

コペルニクス的転回

グラントが起点とするのもまたカントの批判哲学である。――カントは「形而上学から「それ自体においてあるもの」を切除した。あるいは、「それ自体においてあるもの」を「数学におけるX」と同等の機能へと還元した。そして形而上学を丸ごと認識論によって、哲学体系の構築を概念分析や論理分析によって置き換え」(G 3) ようとした。この「批判論的転回」(G 9) によって「哲学は体系的形而上学の構築を企てることが出来なくなり、その批判に終始するようになった」(ibid.)。――これらは《批判論的転回》の一般的特徴を述べたものと言えるであろう。しかしグラントは専ら自然の問題に照準を定める。

この問題意識からすると、《批判論的転回》の眼目は〈自然が精神によって規定されるものとして単に類比的にのみ、つまり専ら精神との関係においてのみ捉えられる〉という点、「自然は知性によって、知性に対して直接に規定されている」(G 15) という点にある。このとき自然は「心に現象する限りの自然」(G 2) にとどまり、断じて「自然自体」(ibid.) ではない。

これと同じことを自然の側から言い表わすと、《批判論的転回》においては「世界〔自然〕それ自体を吟味するための立脚点が世界〔自然〕の内部ではなく、その外部に置かれ」(G 9) ている。この「自然自体」と知性との相互外在的な分断の故に、カントの批判哲学は《二世界論的形而上学 a two-worlds metaphysics》の典型とされる。この種の《二世界論的形而上学》においては「自然哲学はカントのコペルニクス的転回によって押し付けられた認識論的・分

析的境界の内部に閉じ込められたままである」（G 3）。

ポストカント主義

このカントの思考の枠組はその後のわれわれの自然の見方を決定的に支配している。この意味で批判論的転回以後の時代は《ポストカント主義》の時代と呼ばれる。

> 哲学の現在は重大な意味でポストカント的として特徴づけられる。すなわち、カント以後であるという歴史的意味だけではなく、哲学的活動のためにカントが考案した一連の概念装置の組合せによって規定されているという哲学的意味において、哲学の現在はポストカント的なのである。（G 9）

《ポストカント主義》の時代においてはカントの自然理解は二重の形態をとって広く普及している。

第一に、それは《ロゴス中心主義》という形態をとる。「言語が……存在者の帰属先である基体としての自然にとって代わ」（G 6）る。あるいは、自然は「現象学的考察を行なう任意の有限な意識に対する現れ」（ibid.）となる。こうして「自然は知性によって、知性に対して直接に規定されている」（G 15）という思想は「自然の論理学的・言語論的規定、あるいはその現象学的規定」（G 19）へと先鋭化される。この意味においてカントの自然理解は今もなお「殆んどの現象学的哲学、あらゆる倫理主義的・政治主義的哲学、……言語論的観念論の基盤にあって、それらに生気を与えている」（G 15）のである。

しかし第二に、それは《生命中心主義（有機体の哲学）》という形態もとりうる。

> ポストカント的哲学は再三再四、有機体へ、生命現象へと立ち戻る。しかしそれは自然哲学の襲来を阻止するために他ならない。……というのも、哲学の反自然学的傾向が告発される場合に、生命〔現象〕はそれに対する効果的な口実を与えながら、同時に倫理的・政治的問題や実存的問題を哲学の真の領土として中心に据えるからである。……それゆえ、同時に自然哲学で

もありうる形而上学を構成するかのように見えながら、カントがそうであったように、有機体の哲学には、自然と自由の間にある巨大な亀裂に基づく形而上学へと陥る危険が備わっている。あらゆるポストカント的哲学がこの裂目に沿って一列に整列している。……一方で生物学を哲学的科学として保持しながら、他方で地質学や化学を拒絶して自らの管轄外へと置くという形而上学的な不均衡[四]が、それ以後の自然哲学に纏わり付いたままである。(G 10)

《生命中心主義（有機体の哲学）》は仮面を被った《ロゴス中心主義》である。それゆえ一見、懸隔は著しいように見えながら、実際には「生命中心主義からロゴス中心主義への距離は僅かしかない」(ibid.)。そればかりか「二世界論的な形而上学の基礎は二世界論的な自然学 two-worlds physics にある」(G 15)。カントの『判断力批判』における「外的自然という不活性な、非有機的世界と有機的自然」(ibid.) の曖昧な分断から、どのようにしてフィヒテが「自然についてのあらゆる哲学的主張を誓って放棄するような彼の二世界論的形而上学を導出しようとする」(G 10) のかを、シェリング自身の分析を手掛かりとしながら、グラントは丁寧に解説している。[五]

このようにして「自然の概念のみならず、自然の存在さえもが消去されている」(G viii) ことが「カントとポストカント主義者に等しく共通の欠陥」(ibid.) である。この《自然の存在の消去》という事態を、グラントは――自然哲学者カールスに倣って――「無自然 aphysia」(G ix) と呼ぶ。グラントによれば、しばしば喧伝される《形而上学の終焉》も畢竟、形而上学的体系の構築能力の欠乏を意味するものでしかない。しかもこの無能の直接の原因は「現代哲学の「無自然」」(G viii) にあり、この「無自然」はカントの批判論的転回に淵源する。このような診断に基づいて、グラントは「ポストカント的哲学、すなわち自己の問題を設定する際にカントに基本的に依拠するあらゆる哲学にとって、自然哲学は一つの問題である」(G 6) と言う。

第三節　シェリング

シェリングの自然哲学

しかしグラントのいう《ポストカント主義》の時代はカントの批判哲学とその二つの進化形態による単純な一元支配の時代ではない。というのも、この時代にはカントの批判論的転回に対する反対運動もまた見出されるからである。この対抗運動の起源はシェリングの自然哲学[六]に見出される。それは「コペルニクス的転回の転覆」(ibid.)、カントの「批判論的転回の組織的な無効化」(ibid.)に他ならない。

> シェリング哲学の本質であると共にその難しさでもあるものは、この哲学がちょうどカント的転回の諸帰結に逆らって哲学の機能を定義しなければならない、という点にある。「哲学によって……人間は単なる表象を超えた地点にまで運び去られねばならない」。(G 3)

したがってシェリングの自然哲学はカントの批判哲学と正反対の特徴を有している。第一にそれは《ロゴス中心主義》ではない。

> それゆえ自然哲学はカントによるこれらの束縛を拒絶して、自然と知性の間の……単に類比的な関係の彼方にまで自然を追究する。より現代的な用語を用いるならば、自然哲学は……自然を論理や言語の観点から捉えることや、自然を現象として捉えることに異を唱えるのである。(G 19)

第二にそれは《生命中心主義(有機体の哲学)》でもありえない。

> 有機的自然を「無機的」自然から区分する境界線が撤廃されていることが『世界霊について』以来、シェリングの自然哲学の必須の要素であった。……その意図は、有機化の作用を、自然の機械論的秩序にとっての例外にしてしまうのではなく、むしろ自然そのものの原理とする、ということにある。……この境界の撤廃によって、道をはるばる下っていわゆる無生命の物質にまで適用される超越論的ないし観念論的な有機体主

義（organicism）が必然的に生じるだけではない。……「実在的なものから観念的なものへ」と至る間断なき物理主義（physicalism）も必然的に生じるのである。換言すれば、自然の階梯の中にあって「その下流へ向けて」有機体論を投影しているというよりも、むしろ有機化の作用は「物質の自己構成」力、そのポテンツなのである。（G 11）

シェリングの自然哲学は、自然を表象や言語の内へと封じ込めようとするカントの諸制約を――生命（有機体）の領域をも遥かに超える地点へ向かって――一挙に撤廃（無制約化）し、自然そのものへと至ろうとする。「シェリング主義」とは自然の形而上学を無制約化しようとする哲学的企図を表わす言葉である」（G 6）。それは「自然の自律を肯定するが、この自然は心に現象する限りの自然ではなく、自然自体である」（G 2）。――このような本質的傾向を有するが故に、《ポストカント主義》の哲学が《二世界論的自然学に基づく二世界論的形而上学》であるとするならば、その裏返しとも言うべきシェリング哲学は《一世界論的自然学に基づく一世界論的形而上学》と呼ばれなければならないであろう。[七]

シェリング主義

ところでシェリング自身の自然哲学は――哲学史の常識に反して――伝統の終極に現れる「衰弱」（G 6）などではなく、むしろ始原に位置する「発端」（ibid.）である。すなわち、グラントのいう《ポストカント主義》の時代にあっては、カントの《批判論的転回》が一連の後継者を従えているように、シェリングの自然哲学もまた後継者を有している。それどころか「カントに鼓舞された形而上学批判、……その批判に基づく〈形而上学からの自然学の分離〉を超える地点へと哲学が達する度に、シェリング主義は絶えず復活する」（G 5）のである。少し注意して反省してみれば、このことはシェリング以後、現代に至るまで「あの表題［自然哲学］の下に出版され続けている著作の夥しさからも」（G ix）明白である。

このように《自然》という未解決の難問を軸として、二つの勢力が拮抗・対立することによって成立しているのが

《ポストカント主義》の時代である。この時代においては、その端緒をなす対立は今なお直下に、すなわち現在に働いていると言える。あるいはグラントの言葉では、「ポストカント主義は、それが一九世紀の初頭においてそうであったとの全く同様に現代哲学の地平を刻印している」（G 8）。そうであるが故に「シェリングの自然哲学は現代のポストカント的形而上学にとって決定的問題であり続けて」（G 5）おり、その意味で「シェリングはわれわれと同時代の哲学者である」（G 19）。

しかし全体としてはカント的パラダイムが圧倒的に優勢であるため、この反対運動――《ポストカント主義》の軌道――はそれとしては認識されていない。言うまでもなく、「ポストカント的哲学に見出されるこのような軌道がそれとして認識されていないのは、カントの批判論的転回の成功に基づいている」（G 6）。しかしながら、これは要するに、《ポストカント主義》の時代にとって《自然の存在の消去》が「哲学の中心問題」（G ix）であることが了解されず、その中でシェリングが占めている特別な位置も十分に理解されていない、ということに他ならない。

自然哲学によってシェリングはこれまで殆んど試みられたことのない稀有な事例を提供している。すなわち、その開始以来、二百年間、自然を〔知性との〕類比的把握へと閉じこめてきたカントの思考の枠組みから脱却しようとすると、どのような諸帰結がもたらされるのか、という事例である。（G 19）

このような無理解が行き渡っているが故にシェリングと自然哲学の現代性――それらが現代哲学の根本問題であること――を唱えるのは一種の「挑発」（G ix）の意味を持たざるをえない。シェリングは《ポストカント主義》の時代にあって「無自然」を告発する者となる。

それゆえ、シェリングの自然哲学が高く掲げられるとき、それは単に古物収集癖のある知性の対象として他の体系や工芸品の中に歴史の一挿話のように座しているのではない。それはこれらの体系に〈お前たちが消去しているものを暴露せよ〉と挑発するのである。（G

21)

第四節 プラトン

ドゥルーズ vs. バディウ

ニーチェ以来、《二世界論的形而上学》の起源がプラトンに求められ、プラトニズムの転倒が試みられている。しかし、このプラトニズムの転倒というスローガンには《ポストカント主義》の軌道に関する無理解が如実に表われている。既に見たように、グラントによれば、現代における《二世界論的形而上学》の直接の起源はカントの《二世界論的自然学》にあり、シェリングの《一世界論的自然学に基づく一世界論的形而上学》はその転倒に他ならない。しかもこの時、シェリングはプラトンの『ティマイオス』を範として仰いでいる。(八) このような理解を踏まえると、いわゆるプラトニズムの転倒の試みは、実際にはそれが転倒すると称するもの（＝二世界論的形而上学）を自ら生み出そうとする全く見当外れの所業でしかない。(九)

その限りでは〈プラトニズムの転倒を止めてその代りにカント主義と決別せよ〉というバディウの主張は一見もっともらしく聞こえる。(一〇) しかしこの主張は《ポストカント主義》の軌道を熟知した上でのものではない。それはバディウが、プラトニズムを形式主義的に解し、『ティマイオス』を軽視する点にも現れている。字面は同じでも、バディウの要求はグラントの真意からは懸け離れている。〈プラトニズムの転倒を止めてカント主義と決別せよ〉というのは、グラントの意味では〈シェリングとプラトンに従って二世界論的自然学を一世界論的自然学へ、二世界論的形而上学を一世界論的形而上学へと乗り越えよ〉ということでなければならないのである。

《ポストカント主義》の軌道に関するバディウの無理解は、彼のドゥルーズ批判にも現れている。確かにドゥルーズにはプラトニズムの転倒の主張ばかりか、顕著なカント主義（超越論的哲学）的傾向も見出される。しかし双方の思想的立場の区別のために「数か動物か（プラトンかアリストテレスか）」（G 9）という二者択一を掲げて、ドゥルーズを後者に組みする者、有機体の哲学を説くアリストテ

レス主義者と断じるとき、バディウはドゥルーズ哲学の重要な一面を捉え損ねている。というのも、有機体の哲学に対する態度という点に関して、ドゥルーズとシェリングの間には一種の平行関係が見出されるからである。例えば、「実践的なものの優位が、有機的自然との類比によってその口実を見出そうとする代りに、一種の道徳の地質学へと譲渡される」（G 6）という意味で、シェリングの『人間的自由の本質』は「最初の「道徳の地質学」」（G 5）と見なしうる。一方はカント、他方はプラトンから出発しながら――「カント的 geophilosophy 対プラトン的 geophilosophy」（G 8）――ドゥルーズとシェリングは《一世界的自然学に基づく一世界論的形而上学》という相似形を描いている。このようなシェリング=ドゥルーズ理解を基盤として「シェリングの自然哲学は現代の問題であるのみならず、二〇世紀における最も首尾一貫した形而上学者〔ドゥルーズ〕の未完のプロジェクトである」（G viii）とまで言われている。

グラント

しかしながら、ドゥルーズ哲学に関するこの洞察がグラントのものであって――バディウのものではないのは勿論――ドゥルーズ自身のものでもない、ということには十分に注意を払う必要がある。一方でバディウの背後へと回り、彼のドゥルーズ理解の問題点を照射すること、他方で双方の立場の相違を正確に見極めつつ、バディウの批判からドゥルーズを擁護すること、これらを可能にしているのは、グラント独自の立脚点、彼の歴史認識そのものなのである。この認識の故に、グラントは思想史的にドゥルーズの後に位置するように思われる。既に見たように、グラントはこの歴史理解を《ポストカント主義》という語に集約させている。この《ポストカント主義》の軌道の熟知に基づいてグラントは、シェリング哲学をその文脈に位置づけ、そのように位置づけられたシェリング哲学を自身の哲学的立場として引き受けながら、同時にドゥルーズの内に自らのシェリング主義の対話者を見出している。グラントがバディウではなく、或る意味でドゥルーズをその魁とする《思弁的実在論》の創始者になるのは、このような仕方によってなのである。

ところで冒頭で触れたように、本論文の目的は、《思弁的転回》とシェリング哲学の内的連関をこの動向の創始者の一人であるグラントの思想的立場に即して明らかにする、ということにあった。この目的は不充分ながら、一先ず果たされたと言ってよいであろう。――グラントは、彼によって現代哲学の文脈の内へと置き直されたシェリング哲学そのものを自己の思想的立場としている。このように再解釈されたシェリング哲学――すなわち《グラントのシェリング主義》――は《思弁的転回》が遂行される他ならぬその場所となる。《グラントのシェリング主義》はこのようにして《思弁的実在論》の一つとして現代哲学の最前線にその姿を現すのである。

おわりに――グラントからガブリエルへ

この動向の端緒に限って言えば、《思弁的転回》とシェリング哲学の内的連関を明らかにする、ということと、グラントに即して、ということは、事実上同じことを意味していた。というのは、両者の連関の問題を考えようとすると、グラントを手掛かりとする他、選択肢はなかったからである。しかしマルクス・ガブリエルの登場によって状況は大きく変わった。

ガブリエルは二〇〇五年にシェリングの後期哲学に関する研究で博士号を取得し、件のワークショップが開催された二〇〇七年当時は、古代の懐疑主義に関する教授資格論文を準備中であった。しかし二〇一〇年代に入ると、ガブリエルは独自の実在論を提唱し、広い意味で大陸哲学における《実在論的転回》の一翼を担うようになる。〈広い意味で〉というのは、ガブリエルは一方で《新実在論》を唱えつつも、他方で《思弁的実在論》の諸派に顕著に認められる反人間主義的・自然主義的傾向には断固として反対の立場をとっているからである。しかもこの批判の拠り所をガブリエルはシェリング哲学に見出している。[一一] つまり、グラントがそうであったように、ガブリエルも――但しグラントとは異なる意味で――一種のシェリング主義者としてこの動向に関与しているのである。

その結果、《思弁的転回》とシェリング哲学の内的連関をガブリエルの思想的立場に即して明らかにする、ということが、次なる課題として浮上してくる。われわれは稿を改めてこの課題に取り組むことにしたい。

註

（一）論集『思弁的転回』からの引用および参照箇所は略号 ST を、グラント『シェリング以後の自然哲学』からの引用および参照箇所は略号 G を用い、原書の頁数を併記する。

（二）Cf. ST 21-22.

（三）Cf. Brassier *et al*. 2007 : 307-308.

（四）原文は disymmetry とあるが、誤植と判断し、dissymmetry と読む。

（五）Cf. G 9-10.

（六）「シェリング哲学は始めから終わりまで自然哲学である」（G 5）と言われるように、グラントはシェリングの自然哲学をその思想的発展の一時期に限局するのではなく、むしろその全体を貫く「深部静脈」（G 3）と見なし、いわばシェリング哲学を徹頭徹尾、自然哲学であるような哲学として理解しようとしている（「自然哲学としてのシェリング哲学」（ibid.））。この点にもグラントのシェリング解釈が有する研究史上の独自性の一端は垣間見られるが、この彼の見地については――シェリングを哲学史における孤立した現象としてではなく、無数の後継者を有するものと見なすという著しくユニークな観点（本稿一二二頁・下段、参照）と共に――ここでは立ち入って論ずることが出来なかった。

（七）これと同じ意味でシェリングの自然哲学は「何ものも消去しない観念論 non-eliminative Idealism」（G viii）とも呼ばれている。

（八）Cf. G 10.

（九）Cf. G viii.

（一〇）Cf. G 8.

（一一）ガブリエルのシェリング解釈については、浅沼（二〇一五）を参照されたい。

文献

Brassier, Ray; Grant, I. Hamilton; Harman, Graham; and Meillassoux, Quentin, 2007. Speculative Realism. *Collapse* 3: 307-435.

Bryant, Levi; Srnicek, Nick; and Harman, Graham, 2011. Towards a Speculative Philosophy. In *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism*, edited by Bryant, Levi; Srnicek, Nick; and Harman, Graham, pp. 1-18. Melbourne: re.press.

Grant, I. Hamilton, 2006. *Philosophies of Nature after Schelling*, London and New York: Continuum.

Harman, Graham, 2011. On the Undermining of Objects: Grant, Bruno, and Radical Philosophy. In *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism*, edited by Bryant, Levi; Srnicek, Nick; and Harman, Graham, pp. 21-40. Melbourne: re.press.

Meillassoux, Quentin, 2006. *Après la finitude: Essai sur la nécessité de contingence*, Paris: Seuil.（カンタン・メイヤスー『有限性の後で』千葉雅也、大橋完太郎、星野太（訳）、二〇一六年、人文書院。）

浅沼光樹「解題 マルクス・ガブリエル「形而上学の根本的問いに対するシェリングの答え」を読むために」、『ニュクス』第二号、二〇一五年、堀之内出版。